

## 第8章 学習履歴をふまえた高齢者学習支援の方策に向けて

これまでのところで、大阪府高齢者大学校での質問紙調査結果の報告を中心に、韓国益居区シニア福祉センターでの質問紙調査結果といくつかの高齢者学習の場への訪問調査の結果をまとめてきた。これらをふまえたうえで、高齢者学習支援の方策を以下の観点から考察していきたい。

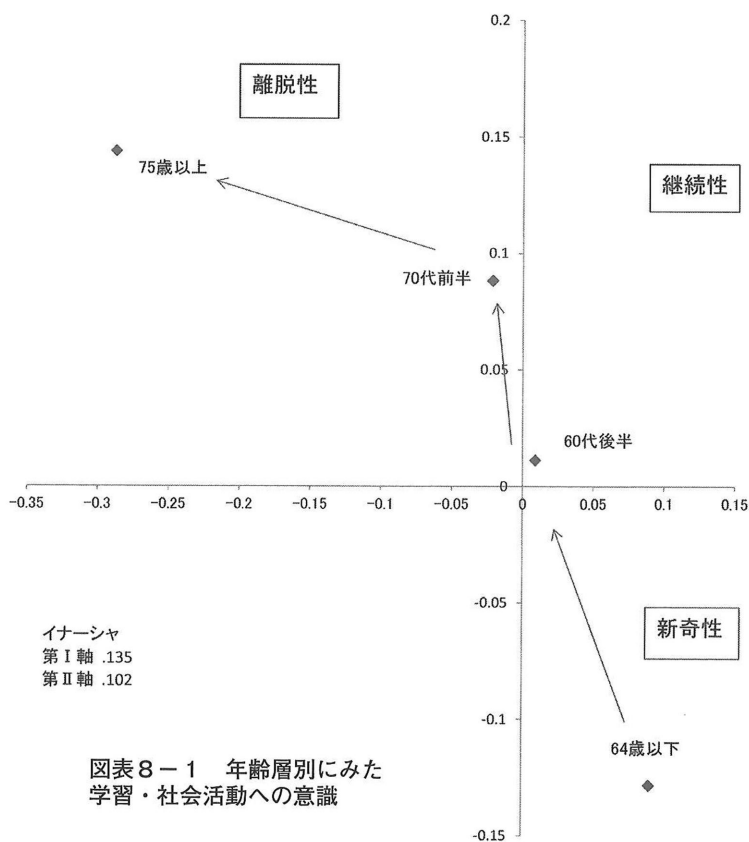
### 1. 高齢者学習支援の理論的背景

調査結果の整理に入るまえに高齢者学習支援にかかわる理論的背景にふれておく。これらの理論的背景をふまえつつ調査結果を再分析・再検討することで、より足場のしっかりした論につながっていくものと考えたい。

①ロバート・アチュリーの継続性理論 アメリカの老年学者ロバート・アチュリー (Atchley,R.C.) は、その一連の高齢者研究のなかから、エイジングの継続性理論 (continuity theory) を提唱した。彼は高齢者の退職への適応行動をみるなかで、それまでの時期においてうまくいった、心地よい、親しみを覚えるといういわゆる「ファミリアー (familiar)」なものを継続することが高齢期のサクセスフル・エイジングにつながると指摘した。高齢者学習支援との関連では、人生の中年期に親和的だった学習スタイルを保持しつつ高齢期の学習を深めていくことが重要だということになる。アチュリーは、退職後の生活の安定化に関心を寄せたが、しかしこの心的機制は、50代から

60代にかけてというよりはむしろ60代から70代にかけての変化に呼応するものだと考えられる。

大阪府高齢者大学校2013年度受講者のデータをもとに、その学習や社会活動への意識構造の変化をみた結果、図表8-1のような変化が確認された。つまりこの意識構造は、新奇性 (60代) → 継続性 (70歳前後) → 離脱性 (70代後半以降) と変化するというのである。こうした学習意識構造の変化は今回の韓国調査結果からは示されなかったが、その理由としては、韓国データの75%が70代以上の層であり、60代の者の回答が少なかったことが原因



図表8-1 年齢層別に応じた学習・社会活動への意識

かと思われる。

②シャロン・カウフマンのエイジレス・セルフ論 シャロン・カウフマン (Kaufman,S.R.) は、エイジングにともなう変化にもかかわらず保持・継続される高齢者のアイデンティティをエイジレス・セルフ (ageless self) と命名し、高齢者のアイデンティティの発達・深化の問題を論じた。外観の変化をこえて高齢者の内面世界は、あるテーマ世界のもとにより深まっていく可能性をもつ。今回の調査結果では、「学習・社会活動への関心の程度」(問10)にて、「自分の内面を見つめる学習や活動をしたい」という項目が、年齢の進行とともに選択率が上昇するという結果を得ている。豊かな内面世界の形成は、70代以降の高齢者学習支援の重要な方向目標となりうるといえよう。

③ローラ・カーステンセンの社会情動的選択理論 アメリカの心理学者ローラ・カーステンセン (Carstensen,L.) は、その社会情動的選択理論 (socioemotional selectivity theory) のなかで、人は高齢期に向かうにつれて、自分の有する資源を情動的に満足しうる活動や目標に注ぐようになると説いた。若者が未来志向的・発展的な目標感覚をもつのに対し、高齢者は、残された時間の観点から目標設定を行うということである。高齢期になると情報の探求や自己概念というものはあまり重要でなくなるのに対し、逆に情動的調整という心的メカニズムはより重要となっていく。とくに後期高齢期においては、エイジング・パラドックス現象と称されるように、抗しがたい喪失の事実とは裏腹に生活満足度が高まるという指摘がある。つまり、高齢者はポジティブな情報や情緒的満足感をより重視するということである。

今回の調査結果でこれに関連する点としては、高大受講後の感想(問5)があげられる。例えば「生きがいを見いだせた」という項目は、60代から70代後半以降にかけて、回答率が倍増していた。「健康的な生活をおくれた」も同様であった。「知識・技能」「社会を見る眼」なども、75歳以降になっても比率低下はしていない。つまり後期高齢期を迎えても、所与の状況への満足度は低下しない／上昇するということである。

④ポール・バルテスの選択的最適化補償論 生涯発達心理学者ポール・バルテス (Baltes,P.) らは、高齢者の生涯発達の理論として、選択的最適化補償論 (selective optimization with compensation=SOC) なる理論を提起した。高齢者は職業領域など、その人が選び取ってきた目標の領域においては成長や発達が可能だということである。しかし、他方で多くの喪失の事実を経験しうる高齢者は、そうした限界のなかでいかなる資源を有効に活用できるのか (=最適化) を考える必要がある。またこの選択と最適化を行うために、同時に補償的・代用的作用を援用することもある。ニュースポーツで高齢者にふさわしいように競技ルールを変えていくことなどが、この例として考えられるだろう。

上記の4つの論は、それぞれの分野でいずれも非常に有名な論である。これらはすべて、広い意味で高齢者の発達や成長を論じたものだともいえるが、いずれも高齢者の学習や教育の問題を正面から論じたものではない。それゆえこうした論を高齢者学習支援の枠組みにあてはめつつ、高齢者学習支援のあり方を考えていかねばならないだろう。例えば、高齢者は継続性を含む学習を好みやすいこと、高齢者の自分自身観は、学習を介したあるテーマ世界のもとに発展が期待できること、高齢者は学習をとおしたポジティブな経験をより重視すること、高齢者は自身の有する資源を最適化しつつ、かつ弱くなる部分は他の方法を用いつつ学習を進めることなどである。

図表8-2 70歳および75歳を閾値とする学習ニーズの比較

	大阪(2013)						韓国(2017)					
	～69	70～	検定	～75	75～	検定	～69	70～	検定	～74	75～	検定
自分の過去をふり振り返り、まとめていく学習	25.4 (2.6)	37.9 (5.2)	** 上*	27.2 (3.0)	47.0 (6.7)	** 上昇	79.7 (27.5)	82.0 (30.0)	-	80.8 (28.1)	82.3 (31.2)	-
過去にはやった映画や歌、文学作品などを使った学習	48.2 (5.8)	51.7 (6.8)	-	48.6 (6.0)	55.5 (6.8)	-	項目なし					
他の高齢の方々との交流活動	47.6 (3.7)	63.6 (7.9)	** 上昇	51.3 (4.4)	63.3 (10.8)	** 上昇	64.2 (14.6)	77.0 (26.4)	** 上昇	71.1 (19.3)	77.5 (29.0)	* 上昇
若者や子どもとの交流活動	50.1 (6.9)	51.1 (8.5)	-	53.2 (6.8)	43.2 (12.7)	**	62.8 (16.8)	54.5 (10.2)	*	61.1 (13.2)	50.5 (10.1)	*
インターネットやパソコンに関する学習	71.0 (19.1)	64.3 (21.0)	*	70.2 (19.6)	66.7 (20.3)	*	81.8 (25.4)	68.7 (25.9)	-	76.0 (26.5)	60.4 (24.7)	**
ボランティアなど他人の役に立てる学習	58.9 (9.0)	56.0 (7.5)	-	59.6 (8.5)	44.2 (9.2)	**	74.6 (18.1)	64.7 (16.9)	-	75.5 (17.1)	55.8 (17.3)	**
園芸や陶芸など土と親しむ学習	54.4 (12.3)	41.3 (8.7)	**	51.7 (11.6)	38.2 (7.8)	*	50.8 (10.9)	45.4 (13.1)	-	50.5 (12.5)	41.7 (20.4)	*
文学や古典の学習	59.0 (10.5)	57.8 (11.6)	-	58.5 (10.7)	59.7 (15.7)	-	54.8 (14.1)	55.3 (18.2)	-	56.4 (14.7)	53.3 (20.4)	*
老後の生き方に関する学習	59.0 (10.6)	62.9 (12.4)	-	60.4 (10.7)	59.5 (15.7)	-	84.8 (31.2)	80.7 (34.1)	-	84.5 (30.6)	77.9 (37.2)	**
地域の歴史や文化に関する学習	74.8 (15.1)	71.4 (17.8)	-	74.0 (15.7)	71.7 (17.9)	-	64.5 (13.8)	61.7 (16.4)	-	64.4 (16.8)	58.2 (14.2)	**
日本/韓国の歴史に関する学習	79.4 (19.1)	75.9 (23.5)	-	78.7 (20.1)	74.6 (23.8)	-	71.8 (26.1)	69.2 (24.0)	-	74.8 (25.6)	63.0 (23.0)	**
世界の歴史に関する学習	69.0 (15.3)	63.8 (17.0)	-	68.2 (15.7)	61.3 (17.6)	↑	64.0 (26.5)	58.9 (14.7)	*	64.1 (22.8)	54.8 (15.7)	**
絵画などの芸術活動	52.1 (12.4)	42.0 (12.6)	**	50.0 (12.5)	41.0 (12.8)	-	56.5 (21.0)	45.7 (14.7)	↑	52.9 (16.9)	42.4 (15.6)	**
茶道・華道・習字などの習い事	47.3 (9.3)	37.9 (5.4)	**	45.4 (8.4)	35.8 (5.8)	-	54.4 (17.4)	43.7 (12.3)	-	50.5 (14.4)	40.9 (12.6)	*
現代の政治や経済に関する学習	62.9 (12.9)	65.8 (19.0)	* 上昇	63.3 (13.9)	72.4 (23.1)	↑ 上昇	49.6 (16.8)	54.1 (16.8)	-	57.1 (18.4)	47.1 (14.5)	*
手軽なスポーツや運動	67.2 (14.4)	59.5 (9.8)	*	66.2 (13.1)	52.1 (11.6)	*	91.2 (46.7)	86.6 (47.1)	-	92.7 (47.5)	78.0 (37.9)	**
旅行や宿泊が加わった学習	項目なし						57.0 (23.4)	62.0 (20.0)	-	65.2 (21.3)	54.4 (20.2)	*

\*\*  $p. > .01.$ , \*  $p. > .05.$ , †  $p. > .10$

学習支援の場面にてこうした論を有効に援用すれば、高齢者学習支援のあり方は、より内実がともなうものになっていくのではなからうか。

## 2. 70代以降の学習支援のあり方について

本研究のひとつの柱は、高齢者学習支援あるいは高齢者教育の実践を一枚岩としてとらえるのではなく、とくに年齢的变化をふまえた学習支援の方策を探るところにあった。それゆえ、60代と70代以降を分けて考える多くの設問を設定した。こうした設問を設定する背景には、すでに2013年調査にて、図表8-1のような年齢的变化が確かめられたからである。その点を多面的に探ること、外国での同様の事象の確認、その点を意識した実践のあり方という3点を本調査のねらいとしていた。

しかし、本調査が70代以降の者への学習支援をさぐるねらいをもつものだったとしても、例えば、問12の60代から70代にかけての学習・社会活動への意識变化をさぐる設問では、図表5-3で示されたように、その4分の1近くの者は「60代と70代とで大きな変化はない」と答えており、「自分の好きなことに打ち込みたい」以外に4割以上の回答率がある項目はなかった。また、2013年調査で明らかにした「継続性」の心的機制が70歳前後の特徴であるならば、学習や社会活動への意識は、必ずしも70歳を分岐点として変化しないとも読み取れる。

そこでいくつかの設問に対して、70歳を閾値とする場合と75歳を閾値とする場合とに分けて、そこでの変化を考察することにした。その結果いくつかの設問において、70歳ではなく75歳が閾値となって変化がうかがえることが示された。そしてこの傾向は、70代以上の回答者を多くかかえる韓国データにおいて、より顕著であった。これらのことから判断して、学習や社会活動への意識は、70歳ではなく75歳を分岐点としてより顕著に変化するのではないかという結論にいたった。

図表8-2では、大阪および韓国データをもとにその学習ニーズの比率变化を、70歳を閾値にする場合と75歳を閾値とする場合との対比のもとに示している。明らかに多くの項目で、70歳ではなく75歳を閾値にしたときのほうが、有意差が多く出ていることがわかる。そしてこの傾向は、70代受講者の比率が高い韓国の高齢者大学においてより顕著であった。

## 3. 学習概念の変容について

高齢者学習支援において重要となる、より根源的なポイントは、学習 (learning) 概念をその本来の意味に即してとらえなおすという作業であろう。「学習」の本来の意味は「経験による行動の変容」であり、そこでの学習の概念は必ずしも現在の社会が学習ととらえるものと同義ではない。場合によっては一般的にとらえられる学習とは反対物である場合もありうる。しかし、学校教育での学習指導要領や企業内教育での業務評価などとは距離がある高齢者教育の場においては、本来的な意味から学習概念を設定し直していく必要があると考えられる。

例えば2013年調査では、ほぼ100個の学習領域からの選択において、「地域の史跡めぐり」が39%の選択率で「学んでみたい」と回答された。「地域の散策」も13%の選択率であった。つまり地域を歩いて巡る行為そのものも高齢者にとっては親和的な学習領域なのである。また国内外への旅行も同様に、比較的高い選択率を示していた。しかしこうした行動は、若年者にとっては

必ずしも学習行動として明示化されているとはいえないだろう。しかし高齢者学習支援の領域においては、地域を散策することを自ら自覚的に学習として位置づけていく必要があるだろう。

こうした点を考慮して大阪府高齢者大学の2018年度カリキュラムを見るならば、従来の高齢者大学などでのカリキュラムになかったような講座が多く開講されているのがうかがわれる。例えば、「ボイストレーニング」「和食」「朗読」「醸造」「鉄道」などがそうであろう。高齢者学習支援においては、学校教育におけるやや固定的な学習概念をこえる学習の場を創造していくことが重要となるだろう。

#### 4. 高齢者学習支援のカリキュラム開発

上記と関連するが、学習内容の精選は他方でカリキュラム構築につながっていく。そこではある学習内容領域を、一定の原理などにもとづいて、体系的に組み立てていく作業が求められる。本調査研究との関連でいえば、70代以降の人びとに対しても親和的な学習内容の明示化がまず大きな課題となろう。本調査では例えば、ライフ・レビューや他的高齢者との交流が、60代から70代後半にかけて高まりが期待できるニーズであるという知見が示されている。こうした点を組み込んだ学習内容を新たなカリキュラムにつなげていくカリキュラム開発が求められているといえる。そしてこの作業はまだほとんど手が付けられてはいない。

学習内容以外にもいくつかの注目すべき知見が提示されている。例えば受講後の感想では、「生活にリズムが出てきた」の項目に対して日韓ともに多くの選択が示された。これは単調になりがちな高齢期の生活に対して、曜日を軸とする生活の節目を築くという効果の反映かとも読み取れる。その意味では短期的な集中講義のような形態ではなく、1年にわたって週1日の講義をちりばめていく学習形態のほうが高齢者にとっては好ましいのかもしれない。

#### 5. 高齢者大学の問題点

最後に本調査の最後に示した自由記述欄の結果をとおして、大阪府高齢者大学の課題と今後のあり方を考えていきたい。紙幅の関係ですべての記述内容が掲載できない点に関しては、おわびを申し上げたい。

回答者の自由記述にはいくつかのタイプのものが多い。まず最も多かったのが行事やミーティングなどに関する意見である。「いろいろな行事や午後のミーティングがやや負担に」(67歳女性)、「行事の回数を減らして受講内容の充実を」(62歳女性)、「高齢者大学では学習に集中したい」(60歳女性)という具合に、スポーツ交流大会などの行事が多いことなど、午後の活動のあり方に対する意見が多かった。逆に午前の講義や社会貢献活動に対する意見は少なかったが、受講者の一定数は「学習・講座」を軸に高大に来ているのであろう。この点をどうとらえていくのが、今後の高大運営の鍵となるだろう。

2つめに多く見られたのが、部屋の狭さあるいは受講者数の多さに関するものであった。「定員(クラス単位)を減らしてほしい」(66歳男性)。「今のクラスの定員が42人なので、全員出席だと混雑の極みであり、せいぜい30人程度にすべき」(67歳男性)。このように部屋の狭さと人数が多いことも今後考えていかねばならない点であろう。

高齢者大学の名称に関する意見もいくつかあった。「大学の名前を『シニア』に変えれば

いいかと思う。『高齢者』では可哀そう」(68歳男性)。「大阪府生涯教育大学のほうが自分の気持ちに合っています」(73歳女性)。現在高大ではそのネーミングの検討を進めており、この点での変化は起こりうると思える。

上記の点を総合するならば、今後の課題としてはやはり、講義・学習と行事・ミーティングとの兼ね合い、ゆとりある学習の場の確保、ネーミングの問題が3つの大きな課題だと考えられた。これら以外にも、「受講料をもう少し安く」とか「駅からの距離が遠い」「クラブの種類が少ない」「講師に当たりはずれが大きい」といった課題をあげる者もいた。

もちろん他方で、次のような好意的な評価を記述している者も多かった。「大きな組織がうまく運営されているのは、多くのボランティアの方々のおかげだと思います。特にクラスのCDさんに感謝しています」(70歳女性)。「定期的に行くことができることは人生にメリハリができて良いし、何より自分の好きなことを学ぶことができることは素晴らしいと思います」(69歳男性)。

## 6. 学習履歴をふまえた高齢者学習支援へ

高齢者学習への支援においては、先にふれた新奇性・継続性・離脱性の3つの要素をいかに兼ね合わせるかが大きなポイントとなるかと思える。この点で60代受講者が多かった大阪府高齢者大学校(2013年調査)と70代受講者が多かった韓国益唐区シニア福祉センターとで受講者の年齢層がやや異なっていたため、逆に両者で異なった学習者像や学習意識像を描くことができた。大阪府データからは60代の者に新奇なカリキュラムを求める層が一定数いたこと、一方で韓国データからは75歳あたりを境に学習への意識が変わることが示唆された。

これらを総合して問題提起するならば、退職をひとつの契機とすることが多い60代から70代前半の者に対しては、成人教育の原理をも包み込んだ、新たな世界が開ける側面をもつカリキュラム開発が有効かと思える。同時に人間関係の再構築を進める仕掛けをつくっていくことも重要であろう。そしてそのうちの何人かは、自身のニーズと合致した学習領域と継続的にかかわっていくことになるだろう。いわゆる継続性を軸とする学習支援の重要性である。もちろんそうした継続性を軸とする内容を好まない高齢者も多くいるだろう。それゆえ他方で個々の学習スタイルと合致した支援の方向が重要となつてこよう。

しかし韓国データから垣間見られるように、75歳前後より新奇性や継続性だけではすまない学習意識も表面化してくる。つまり外に向かう活動や広がり志向する学習を抑えるという傾向である。いいかえれば内面世界の深まりを重視する、より鑑賞的・観照的な学習である。芸術や歴史、古典など、よりその世界の深みを味わうというタイプの学習である。カールテンセンのいう「人生の残り時間」の視点やスピリチュアリティの視点から学習内容開発も、今後の重要な方向性となるだろう。